

# 古文字學研究文獻提要

## “世界漢字學會第七屆年會報告論文より”

今號は二〇一九年九月に立命館大學で開催された世界漢字學會第七屆年會の報告論文（予稿集掲載論文）より、海外の研究者による古文字學に關係するもの五篇を選んで紹介する。予稿集の PDF は、<http://www.waccs.info/notice/view.php?idc=562&page=1&search=&find=より閲覧・ダウンロードが可能である。また學會の様子については、本誌第八號掲載の佐藤信弥「世界漢字學會第七屆年會參加報告」を参照。>

### 白於藍「釋“弔”」

本論文の著者白於藍氏は、中國の華東師範大學所屬の古文字學研究者で、『簡帛古書通假字大系』（福建人民出版社、二〇一七年）等の著作で世に知られている。

本論文は、白氏による「弔」字の新たな字釋を述べたものである。同題の同内容のものが王錦城との共著として『江漢考古』二〇一九年第三期に掲載されている。

まず白氏は、『説文解字』の「弔」の字釋を挙げ、大徐本・小徐本で細かい違いがあるものの、「馭禽（人が弓を持ち、会合して禽獸を

伐ち追う）」という意味の会意字として釋されてきたことを述べる。そして、清代以降の「弔」字の解釋史を整理し、それらを『説文解字』の字釋に従い、更にそれを補充した論を立てるものと（錢大昕・桂馥・段玉裁・王筠等）、『説文解字』の字釋に誤りがあるとして、新たな字釋を打ち立てるものとに分ける（徐灝・高翔麟等）。

白氏はこのように『説文解字』解釋史の中で展開された「弔」字の解釋史を整理した後、古文字學の見解を踏まえてその当否を整理する。まず、「弔」は金文中には常見の字であることを述べ、その書き方を二種類（西周早期から確認できる A と、春秋時代より確認できる B）に分けることができるとする。その何れもが、人に彡或いは彡（以下、白氏の表記に従って△とする）形の何かが纏わり付いている形であるとする。そして、金文で確認する限り、△は『説文解字』の字釋である「弓」の形と同形になっているものは見たことがないと指摘する。

そのため、白氏は『説文解字』の小篆の字形が誤っており、そのため許慎が不確かな分析をってしまったと結論づける。また、『説文解字』を基盤に置いた清人の二種類の解釋も又、従うべきではないが、ただ

「弔」が人に従う字形であることのみは、正確な分析であるとした。

次に白氏は、金文の字形を基盤にした字釋史を整理する。

まずその早期の例として、呉大徵の「叔」とする説を採り上げる。

白氏は、この字釋そのものは間違いであるとしつつ、短い矢に紐を結びつけて鳥を射る、いわゆる「いぐるみ」の象形であるとした呉氏の字釋は、後世に大きな影響を与えたことを指摘する（例えば、白川靜『字統』もその説を採用する）。呉氏の影響は、甲骨文字が発見された後にも續き、羅振玉・郭沫若・高鴻緒等が呉氏の字釋を基礎に、そこから考察を進めてきたとする。

白氏はこれら「弔」に關する古文字學の字釋史を振り返った後、諸氏は『說文解字』の「弓」説を間違いとしたものの、羅振玉の「矢にいぐるみの紐が結びついた形を象つたもの」とする見解に大きな影響を受けていることを指摘する。そして、白氏の見解の限り、林義光が金文の「叔」と字釋された字を正しく「弔」であると指摘した人であるとする（ただし、字釋については『說文解字』の影響を受けており、正確ではないとする）。その後楊樹達が「弔」の字釋を行うが、羅振玉説を基礎としたものであり不正確なものであった。ただ、楊氏の「繳の初文」とした見解は、周法高・季旭昇等、後に大きな影響を与えたことを指摘する。

白氏は、これら△を「いぐるみの矢と紐」の象形と見なす説について、問題があるとする。そしてその理由を、「△が人に纏わり付いている」形を象つた会意字だが、もし△が「いぐるみの矢」の象形であった場合、どのようにして現在の「弔」字の意味になるのが問題であ

るとする。そして、そもそも「△が人に纏わり付いている」形である以上、いぐるみ猟は遂行することが不可能であり、そもそも弓に従う字釋が間違いである以上、いぐるみもそこに書かれる必然性がないこと、そしていぐるみ猟が通常鳥を対象にする以上、幅が細い物であるのに対し、「△が人に纏わり付いている」形である場合、そのような紐では人を拘束できず、また先秦の典籍にもそのような記述が存在しないと指摘する。

白氏はこのように先人の字釋を否定したが、別に何琳儀の説「人に従い、虫に従う。会意不明」を挙げ、これが唯一信ずべきものであるとした。白氏は何説の「△を虫である」とする観点に着目し、その指示すべき理由を三点挙げる。

まず一点目として、甲骨文字と金文の「虫」字形が△の字形と接近していることを挙げる。

次に二点目として、金文の字形の分析を根據に、△の字形が「虫」から変化したものであると指摘する。

また三点目として、何琳儀説を基礎に、「弔」字は「人に虫が纏わり付いている形」の会意字であるとし、「毒害」の「毒」の初文ではないかとする。

そして白氏は、「弔（端母藥部）」と「毒（定母覺部）」とは音韻的にも近いことを指摘し（声母は舌音、韻部は近接）し、金文での「弔」の主要な用法は「叔」「淑」であり、典籍中に見える「叔」「毒」兩字を声符として持つ字は、音が近く通假の關係にあるとし、「弔」「叔」もまた読音が近接するとした。

更に典籍の例を挙げ、「毒」には古く「害」の意味があることを指摘し、「弔」は元々有毒の爬虫類が人を咬むの形状を表現した文字であり、「毒害」の意味と同じであるとした。また、『説文解字』の「毒」の説解「厚也」は「毒」字の本義ではなく、清人の説くように「篤」の假借義であることを指摘し、また説解の「害人之艸往而生」については、毒草について述べたもので、「毒」は毒草の専用字として作り出されたものであり、「毒害」の「毒（即ち「弔」）とは來源が異なる」と結論づける。

最後に、よく似た例として裘錫圭が「虫」と隸定した文字を挙げる（拙稿「釋『虫』」（『古文字學研究文獻提要』裘錫圭の甲骨文字に関する論考より）『漢字學研究』第六号、2018年）参照）。裘氏は「虫」を傷害の「害」の本字であると隸定し、現在學會で有力な説と認められていることを指摘し、本稿で挙げた「弔」字についても「虫」と同様の形状で「爬虫類の毒虫が人に纏わり付いて噛み傷をつけている状況」を象った会意字であり、後に「弔」字を借りて「問終」の義を表現する字となり、文字の構造から導き出される本義は殆ど忘れられてしまったとする。そして、「毒」・「害」双方共に、虫（爬虫類）に關連する言葉であるが、これは、古人が日常目にする「毒」や「害」が毒蛇の類に關連があったのかもしれないとする。

（山田崇仁）

### 郭靜云「先秦「率」・「衛」・「達」異體字用意之區分」

本論文は、「率」字とそれを用いた「衛」字・「達」字について、時代的な用法の相違・變化を述べたものである。著者の郭靜云（Olga Gorodetskaya）は臺灣の國立中正大學の所屬で、『夏商周・從神話到史實』（上海古籍出版社、二〇一三年）などの著作がある。

後漢代に著された『説文解字』においては、「率」の成り立ちを「捕鳥の畢（あみ）なり」（十三上・率部）とする。一方、「達」は「先道（先導）なり。走に从い、率聲」（二下・走部）、「衛」は「將衛（ひきいる）なり。行に从い、率聲」（二下・行部）とし、いずれも純粹な（聲符に意味を含まない）形聲文字とする。

郭氏は、率（宀）の字源を狩獵の網（※筆者注1）としたうえで、殷代の甲骨文で派生義として「率領（ひきいる）」が出現したと想定する。そして、西周金文を中心資料として、「達」や「衛」に使われている「率」が單なる聲符ではなく、それらが「率」から分化した字形であることを論じる。

殷末〜戰國時代の金文には「率」の用例が少なく、また字義としては「皆（みな）」や「被率領（ひきいられる）」の意味で使用されており、「皆」の字義については「率領」の意味とつながるものと見なす（※筆者注2）。「率」は原義での用例が見られないが、これは金文の主題と關連しないためである。

一方、「率」に辵（辵）を加えた「達」は金文に用例が多く、「率領」や「先導」の意味で用いられている。「王、南宮をして王の多士を達（ひ

き) いせしむ(杵伯篋) などがある。「達」の略體としての「率」や「率」についても同様の字義である(疋はイと止から成り、それぞれイや止を略したもの)。

西周晩期になると、「衛」の形が出現する。これは率(𠄎)の四点を「行」に誤ったものに「止」を加えたものであり、「達」の略體の「率」の訛形(俗字)にあたる。字義についても同じく「率領」であり、「武公、多友に命じて公の車を衛(ひき) いて京師に差追(追撃)せしむ」(多友鼎) などがある。そのほか、略體として「𠄎」も見られる。

同様に、「衛」や「衛」については「率」の訛形であり、字義は「被先導」などである。

以上をまとめると、金文中で意符として疋やその略體を加えた字形(達・率・率・衛・率)については「率領」として使用され、原型またはその訛形(率・衛・衛)については主に「被率領」として使用されたことになる。一方、文献資料では「率」が「率領」の意味(『尚書』顧命など)にも「被率領」に近い「奉順」の意味(『逸周書』大匡解など)にも使用されている。こうした能動・受動雙方に用法がある文字は文献資料に多く見られるが、金文においては、「疋」やその略體を含む字形が能動の意味で、含まない字形が受動の意味で使用され、区分されていたのである。

『説文解字』の「率」の定義(畢なり)がその本義であり(前掲注1参照)、「疋」を加えた「達」の字形が新しく出現した「率領」の字義を表している(※筆者注3)。「衛」については文献資料に見えないが、「衛」から出現した字形であり、「被率領」ではなく「將衛」と

したのは後漢代の錯誤である。

戦國時代の楚簡にも「衛」や「衛」の形が見られ、やはり「衛」は「率領」の意味で使用され、「衛」については「被率領」にあたる「從」の意味で使用されている。前者については「人を衛(ひき) いる者有り、人に従う者有り」(郭店『六德』)などの例がある。

『説文解字』では、「達」や「衛」に使われた「率」を單なる聲符と見なし、また「衛」を「將衛」とする。しかし、実際には殷代の甲骨文において「率」に「率領」の字義が出現し、その後、西周代の金文や戦國時代の楚簡で「疋」などを加えた「達」や「衛」などの異體がその字義で用いられ、また「率」やその訛形の「衛」などは、「被率領」などの意味で用いられ、区分されていた。

(※筆者注1) 日本では、率の字源について麻糸を作る様子とする説が有力視されている(加藤常賢『漢字の起原』五二六頁(角川書店、一九七〇年)や白川靜『新訂 字統』五七六頁(平凡社、二〇〇四年)など)。甲骨文で鳥を捕らえる網の象形に該当するのは、率(𠄎)ではなく禽の初文の𠄎(𠄎)や網の初文の𠄎(𠄎)であり、禽の異體(𠄎)や羅の初文(𠄎)で鳥を捕らえる様子が表現されている。ただし、網にせよ糸にせよ、金文に記される事柄ではないので、本論文の議論には影響しない。

(※筆者注2) 「率」については、殷代の甲骨文に、すでに「ひきいる」(『甲骨文合集』九五など) だけではなく「みな」(『甲骨文合集補編』一〇四三六など) の字義も見られ、いずれがより古い字義かは明らか

ではない。

(※筆者注3)「達」は、構造としては「宀」を意符、「率」を聲符とする形聲文字であり、「率」の部分は「率領」の意味も含む亦聲である。

(落合淳思)

## 胡雲鳳「説弓」

本論文の著者胡雲鳳は、臺灣海洋大學所屬の研究者である。

本論文は卜辭中の弓(弓)字のなりたちを、従來の説をふまえないから批判し、また否定詞として使用される𠄎、𠄏字の二形が卜辭上で交代しながら發展する軌跡を示したものである。

全體は一から三の項目に分けて論じられているが、弓(弓)字のなりたちの所論に重きが置かれ、多くの例證が挙げられている。

第一項では、まず王國維、唐蘭等の先行するの諸説を紹介し、否定詞として使用される𠄎(弓)字が勿字の假借字にあたるとした後、裘錫圭説に言及する。

裘錫圭は第三期卜辭の弓字が𠄎、𠄏に作ることを主要な根據として、この字形が一、二期の卜辭に見える𠄎字の比較的原初的な形であり、併せてこの𠄎が「弓弦が撥ねたあとの絶え間ない動き」の象形であるとして、發の初文とする。そして「弓弦を撥ねる」意味を明確にするために、支旁を加える形で、隸定すれば𠄎字となる𠄎、𠄏字ができ、春秋後期の「工戲大子劍」に至って、𠄎旁を加えた𠄎字となる。ここに𠄎字の「發」字への字形演變の軌跡を見ることができるといふ。

著者はこの説に疑問を呈し、

①𠄎字は弓の弦の振動する形であるのか、

②𠄎が𠄎の原初の字形であるのか

という二點をあげて論を展開する。まず、弓の従う「弓」は線状化して𠄎形となる。圖象化された甲骨文の弓の基本形には二種類があって、𠄎と𠄏とに分別できる。前者はやや繁體、商の時代の弓の形におおよそ一致する。後者はやや省略している。繁體の字形から商の時代の弓の形式をみると、弓の柄とその上の短い斜めの一畫は、同じ側にある。弓の弦の位置は短い斜めの一畫の反対側にある。𠄎と線状化された𠄎とは對稱的であり、圖I(以下、圖は本稿末尾の「圖版」を参照)のようになる。

花東37にある同版の弓の字の繫體𠄎、省略體𠄎を見較べてわかることは、線状化された弓の字形は、弓の頭から彎曲した弓の柄に沿って下部の輪郭を描寫している。線状化された𠄎(弓)の字形は、その象形を弓の柄の部位からとっており、短い斜めの一畫から下は、実は弓の柄の外側であって、弓の弦の位置ではない。

古人の弓を用いた戦闘や狩獵では、時に及んでよく弓を張り、快速に射ることが必要とされた。これに因って、弓を持つときには必ず弓の柄を握り、弓の弦を内側にして迅速に射るのに便利ないようにしている。この弓を持つ姿勢は、戰國期の青銅器の圖IIに見える。

これを受けて、再度𠄎・𠄎の字形を見ると、従うところの斜めの二點は、弓の柄の外側に位置し、弓の弦の部位にあるのではないことがわかる。これにより、𠄎の従うところの二點は、弓の弦の振動を

表す符號とすることはできないと結論付けている。

また、第三期卜辭に見える𠄎字の縦の短い小點畫は、第三期の習慣的な書法であり、𠄎に変わりはなく、𠄎のやや特殊な書法であることを、第三期の酒、易、勿字で例證している。

第二項では、𠄎の従うところの二點が、弓の弦の振動を表す符號とすることができないならば、それは何を表すものかについて、朱芳圃、朱歧祥兩氏の説をふまえて論究する。

朱芳圃は、𠄎を弛んだ弓の象形、𠄎を弓の字を重ねるしるしとし、𠄎を弔字の別體とする。朱歧祥は、𠄎と𠄎の二字の違いは、卜辭の前期、後期の違いに依るとし、𠄎は重文符號であるとす。この兩氏の説をふまえて、著者の論が進められている。

否定詞に使用される𠄎(𠄎)、𠄎(𠄎)字の二形が同字異體であり、否定詞としての用法もほとんど同じであるところからして、𠄎の二點畫は、𠄎(𠄎)字の内側の省略形ではないかという。合集 30757 の同じ版上の用法を同じくする「𠄎已・𠄎」<sup>1)</sup>と「𠄎已・𠄎」<sup>2)</sup>の例を挙げてこれを例證している。また、卜辭の𠄎字の上部の𠄎が𠄎に省略される例、後代のものであるが、侯馬盟書 326 の𠄎字が、同版上で𠄎に省略される例を挙げて検證している。

第三項では、𠄎と𠄎の二字の、否定詞として用いられる時間的な交代の軌跡を検證している。

第一期卜辭に見える兩字のうち、𠄎(𠄎)字は、否定詞と人名・族名とに兼用されている。第二期に至って、これを區別するために𠄎(𠄎)字が否定詞として専用されることになった。第二期以後𠄎(𠄎)

字の人名・族名としての使用が無くなるため、再び兼用されるようになったが、最終的には𠄎(𠄎)字が否定詞の用法として固定化されたと、結論付けている。

以上、論文の提要を揚げたが、多くの文字例を挙げての論證は丁寧で、特に字のなりたちについての論究には説得力があり、新しい知見が得られる。

〔圖版〕(いずれも本論文より引用。出典は本論文を参照)



圖 I








圖 II

### 金赫「試論「交」・「𠄎」の同源關係」


(笠川直樹)

本論文の著者金赫は韓國の國立慶尙大學の所屬である。本論文は比較的短い。まず、「一、𠄎字の字源問題」と題して、『甲骨文編』の「交」に𠄎等の字を収め、『説文』にも、「𠄎交脛也」とあるが、これらの字形は「𠄎」と釋すべきであり、金文の𠄎(集成 04050)等もおなじく「𠄎」であり、「𠄎」の字形は、「𠄎」の初文であり、戰國文字では𠄎や𠄎等と書かれている、と述べる。

次に「二」交 與 交 兩個字的字形關係」と題して、字源を論じる。

交 は甲骨金文で  や  等と書き、筆が交錯した形を抽象しており、「交錯・交叉・變化」の意を含んでいる。交 は、この 交 に筆畫を加えることで戰國時代以後に次第に分化してできた字形であり、この字形の變化は、 から  に、さらに  となったのと平行している。似た例に、卿／郷・老／考・間／閒・直／徳・同／用などがある。音では、交 は見母宵部、交 は匣母宵部であり、この二字がもと一字であったことが證明できる。

三番目として「結語」（誤って「四」と附されている）である。

前人は、交 字を「脛を交える形」とし、甲骨文字の  (黄) を 交 と釋していた。交 字の出現は戰國時期であり、交 から分化したもので、「交叉」「交往」の意である。

(村上幸造)

### 趙平安「從 耳 字的釋讀談到甲骨文的 巴方」

本論文の著者趙平安は中國の清華大學所屬で、『新出簡帛與古文字古文獻研究』(商務印書館、二〇〇九年)、『新出簡帛與古文字古文獻研究續集』(商務印書館、二〇一八年)などの論著がある。本論文は世界漢字學會第七屆年會での口頭發表と前後して、『文獻』二〇一九年第五期に同題で掲載された。本稿では『文獻』掲載版を底本とする。構成は一〇四の四章からなる。

「二」では、郭店簡、上博簡、清華簡といった戰國簡帛文字から、「耳」

あるいは「耳」より構成される文字の字形を確認する(圖①～②)。以下、圖は本稿末尾の「圖版」を参照)。この字形に基づくと、春秋金文にもいくつか「耳」に従う字が見出せるとする。たとえば鄒濬尹征城(中國社會科學院考古研究所編『殷周金文集成(修訂增補本)』(中華書局、二〇〇七年)四二五。以下、集成と略稱)の「睂」と隸定されてきた字(圖③)、叔夜鼎(集成二六四六)の「睂」と讀まれてきた字(圖④)、國差罇(集成一〇三六一)の「睂」(圖⑤)などは、いずれも別字として解釋されてきたが、その實いずれも「耳」聲の字とみることができ。

ただ、「耳」の下部の「耳」の部分は、古文字の「耳」字の寫法(圖⑥～⑧)とはかなり異なることを指摘する。たとえば戰國期の「耳」字には、耳廓の上部に由來する一横畫がしばしば見られるが(圖⑨)、「耳」には見られない。戰國簡帛文字と春秋金文の「耳」の「耳」の部分の寫法は、同じ材料の「耳」あるいは「耳」に従う字のそれとは明らかに異なる。よって小篆の「耳」(圖⑩)が「耳」となっているのは譌變によるものであると結論づける。

「二」では、「耳」の下の部分は「耳」ではなく、「揖」字の初文にあたる形であると、最初に結論を提示する。それではこれは何を象っているのかというと、戰國文字のそれは、人が揖を行う形であり、右側は身體、左側は腕や手先の形にあたるのだという。「揖」とは、拱手する時に両手で環形をなすことを指す。

ならば「耳」の上の部分の「口」はどう解釋すればよいであろうか。『説文』口部には、「耳、聶語なり。口に從い耳に従う。『詩』に曰く、

「耳」部に曰く、聶、耳を付けて私かに小語するなり。按ずるに聶は兩耳を取りて一耳を附く。聶は口を取りて耳を附くなり」と解説する。許慎は「耳」を「口」に従い、「耳」に従う會意字と見ているが、甲骨文にはこれとは別に「口」に従い、「耳」に従う「聽」字が存在している（圖⑱）。また、耳を付けて私かに語るという字義については、三つの「耳」に従う「聶」字がそれを表しているの、「耳」に従い「口」に従う字でもって同じ意味を表す必要性がないとする。

以上のことを踏まえて、「耳」は「口」に従い、「扞」に従い、かつ「扞」は亦聲であり、扞をしながらこそそと話す形でもって「聶語」の意味を表すのであるとする。「耳」の下部のいわゆる「耳」の部分は、實際は「扞」字の子聲符であり、また「扞」の初文である。

この造字構造は「達」「遺」字の古文字のそれと同様である。「達」は「疋」に従い、「夊」聲の字で、「夊」の聲符にあたる「ナ」の部分（後に演變して「大」となる）が針砭（石針）の形を象っており、その初文である（圖⑲）。「達」字については趙平安「達」字兩系説及び、それを解説した本誌第六號の山田崇仁による提要を参照）。「遺」は「疋」に従い「貴」聲の字で、「貴」の聲符にあたる部分こそが「遺」の初文で、兩手で掬ったものを遺失する形を象る。これらはいずれも子聲符が初文であり、初文が後に用いられなくなったものであるとする。

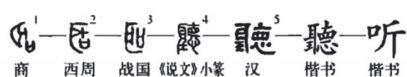
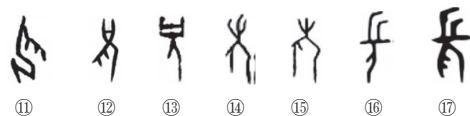
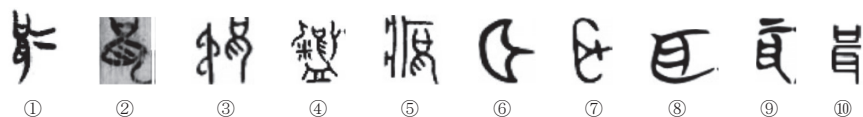
「三」では、従来甲骨文字で「巴」と釋されていた文字を取り上げる（圖⑩）。この字釋は唐蘭以來のものであるが、その實これは「扞」と釋すべきで、「扞」の象形初文であるとする。甲骨文字から戰國文

字までの字形の變化を追うと、腕や指にあたる部分の變化はそれほど大きくなく、跪座する人の形の部分の演變は、古文字の「卩」と似ているとする。

そして甲骨文字の「扞」が方國の名稱として用いられることから、その地望を考證する。扞方の地望については、晉南、殷東、殷の西南など諸説ある。甲骨文で扞方の近隣と見られる方國とその地望として、「而」（晉南）、「奚」（河南沁陽ないしは河北永年）、「下兌」（甘肅成縣西）、「沚」（殷の西北部。山西中北部と河北西北部一帯）を取り上げる。ついで包山簡に見える地名「集」「集陽」に注目する。これは『左傳』定公五年に見える「稷」地に比定されている。緝部從紐の「集」と職部精紐の「稷」とは主要な元音が同じで、ともに入聲の字であり、古音が近く通假が可能というのがその根據となっている。ただ、春秋期の「稷」地は、楚地にあるもの以外に、齊地、宋地、晉地にそれぞれ同名の土地が存在する。これらのうち、今の山西稷山に位置する晉地の「稷」が甲骨文の扞方の所在であり、その地望は甲骨の「而」「奚」などとも近いと主張する。

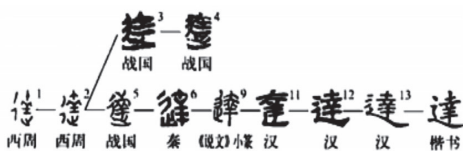
「四」では、補足として甲骨・金文で過去に「耳」と釋されていた文字を取り上げる（圖⑫）。この字は賜物を渡すの意の「祝」にあたり、「兄」字（圖⑬）の異體であったのが、後に「祝」の専字として、異體によって分化職能したのであるとする。「兄」には指にあたる部分がないが、甲骨・金文の「老」字（圖⑭～⑮）、「長」字（圖⑯～⑰）など、指の部分は省略が可能であると指摘する。ただしこの字形で「祝」を示すものは、西周中期以後見られなくなるとする。





1 《甲文編》466頁。2 《金文編》772頁。3  
《戰文編》787頁。4 《說文》250頁。5 《篆隸表》  
853頁。

⑮



1、2 《金文編》101頁。3、4、6 《戰文編》  
98頁。5 《楚系簡帛》143頁。  
9 《說文》41頁。11、12、13 《甲金篆》  
110~111頁。

⑯

〔圖版〕（いずれも本論文より引用。出典は本論文を参照）

（佐藤信弥）

